

## 吉田裕・森茂樹著 『〔戦争の日本史23〕 アジア・太平洋戦争』

原田，淳一  
九州大学大学院法学府修士課程

<https://doi.org/10.15017/16469>

---

出版情報：政治研究. 55, pp.211-212, 2008-03-31. 九州大学法学部政治研究室  
バージョン：  
権利関係：

吉田裕・森茂樹著

## 『戦争の日本史23』アジア・太平洋戦争』

(吉川弘文館、二〇〇七年、三一八十三頁)

本書は、近現代日本政治史の第一線で活躍する二人の研究者によって吉川弘文館の『戦争の日本史』シリーズとして刊行されたものである。このシリーズは、「戦争とは何か」を問うものであり、本書はアメリカとの「無謀な戦争」とも言われるアジア・太平洋戦争を検討している。エピソードにも取り上げられているように戦争の「記憶」の問題は戦争体験者の減少にともない、重要性が益々増加している。そのような状況下、本書は「記憶」の問題に対する実証研究からの応答と位置づけることもできよう。

さて、本書の構成についてだが、プロローグ・II・VI・VII・エピソードについては吉田裕（敬称略、以下同様）が、I・III・IV・V・VIIIについては森茂樹が執筆している。以下では各章が取り扱う内容を順に紹介することとしたい。

まず「プロローグ」において、日本人がアジア・太平洋戦争を正当化することは出来ず、侵略国家という断罪には違和感を感じ、逡巡していることが確認される。また、日本人が戦争責任問題から逃避してきたことと、閉塞した今日の状況

との関連を感じていることが指摘される。このような状況を踏まえ、アジア・太平洋戦争の性格と原因について考察を加えるとしている。「I アジア・太平洋戦争の開幕」では、日米戦争の原因、目的、戦闘地域などの全体像が俯瞰される。

さらに、明治憲法体制の分立・多頭的構造が押さえられ、大本営、御前会議などの重要な組織を検討し戦争指導体制が明らかになる。以上を通じて、筆者は日米開戦決定過程を外交の側面から検討する必要があるとし、その過程を跡付ける。

「II 日本軍の特質」では、日本陸海軍の作戦思想における特質が抽出されている。陸軍では短期決戦主義、精神主義、軍近代化への関心の低さなど、海軍では艦隊決戦思想、「漸減邀撃」作戦、海上護衛戦の軽視などの特質が抉り出される。

また、軍事官僚機構の特質についても統帥権の独立、官僚機構の分立性などの問題が説明されている。

「III 緒戦の勝利と蹉跌」では、南方作戦に基づきシンガポールなどの極東英領の攻略からミッドウェイ攻略までの展開が扱われている。海軍の対米作戦は積極攻勢主義で戦域を拡大に設定したため、南方資源要地の防備よりも決戦において戦力を浪費することになる。その結果、日本は緒戦で勝利を収めるも、ポートモレスビー攻略以後蹉跌をきたすこととなる。「IV 戦局の転換」では、ガダルカナル戦からニューギ

ニアの戦闘の過程が説明される。筆者は、戦局の転換をガダルカナル戦に見ており、ニューギニアにおける攻防こそが日本の国力を枯渇させ、戦争全体の帰趨を決したとする。また、戦争指導に関して天皇は戦争全体の総合的見地から指示を出すことは困難であり、小磯内閣になってようやく政府が統帥事項に関与できるようになったとして、戦争指導体制の問題点も指摘している。「V アジアの戦線と『大東亜共栄圏』」では、戦争を正当化する「民族解放」のイデオロギーの虚実と、中国戦線の展開が描かれる。「民族解放」は日本の建設する新たな帝国の基本原則と位置づけられ、「大東亜共同宣言」の独善が暴かれる。中国戦線では、米英に支えられた中国軍、ゲリラ戦を活用した共産党に悩まされる日本軍が描かれている。「VI 銃後の諸相」では、兵力動員、国民の画一的組織化、戦時プロパガンダなどが扱われ、銃後の国民生活が描かれる。兵力動員に関して、将校の質の低下、女性・植民地からの動員の問題が生じた。さらに、民需生産は犠牲にさらされ、プロパガンダも行われていた。闇市の横行、本土空襲を経て戦意は決定的に低下していったとされる。

「VII 絶対国防圏の崩壊から絶望的抗戦へ」では、絶望的抗戦の段階であるマリアナ失陥が検討され、「玉砕」命令に典型的に現れている死生観が抉り出されている。既婚の兵士、知

的障害のある者の動員もあって「皇軍」の精強さが失われ、戦局は絶望的になっていく。「戦陣訓」や「玉砕」の思想が広まり、特攻作戦も多様な形をとった。「VIII 降伏とその後」では、戦局が硫黄島、沖繩へと移り、ソ連を仲介とする和平工作が失敗し、ポツダム宣言を受諾する過程が描かれる。そこでは「聖断」に至る過程を天皇個人に照明を当てるのではなく、当時の政治的文脈の中で位置づけ、対ソ工作が検討される。「エピローグ」では、戦友会の活動停止に見られるように戦争体験者の減少が進む中、戦争の「記憶」が相互に矛盾する危険性、集合的な「記憶」に働く政治力学の問題性が指摘され、実証的な歴史研究の重要性が改めて認識されている。

以上のように、本書は通史的な体裁を取りつつも様々な重要な問題を論じている。すなわち、天皇の戦争指導、軍部の政治的影響力、「大東亜共栄圏」のイデオロギー、植民地住民の動員、銃後の生活などの諸問題に対して目配りの利いた内容となっている。一般読者層にはもちろんのこと、大学におけるテキストとしても今後活用されることが切に望まれる。

(原田淳一)